

加賀市「山の日」フォーラム 事業報告書



2020年11月

一般財団法人全国山の日協議会

目次

挨拶	0
「山の文化を未来につなぐ 山の日記念フォーラム in 加賀」企画の背景と狙い 全国山の日協議会 評議員 鹿野 勝彦 (金沢大学名誉教授 文化人類学)	
報告 1	0
鞍掛山と共に歩む里山の魅力作り ～未来へつなぐ地域づくりの活動～ 滝ヶ原町鞍掛山を愛する会 会長 山下 豊	
報告 2	0
若者たちに支えられて 一般社団法人 おおづち 代表理事 二枚田 昇	
報告 3	0
《深田久弥山の文化館》のご紹介 NPO 法人 深田久弥と山の文化を愛する会 紋谷 友幸	
報告 4	0
伝統を通じて過去と未来をつなぐ 白山手取川ジオパーク推進協議会 メイ・スーザン	

「山の文化を未来につなぐ山の日記念フォーラム in 加賀」

全国山の日協議会は、今年(令和2年)11月7日に、加賀市、NPO 法人深田久弥と山の文化を愛する会との共催で、「山の文化を未来につなぐ 山の日記念フォーラム in 加賀」を加賀市内で開催することとしていました。

フォーラムでは加賀市をはじめとする加賀地域において、山の文化を守り継承する活動を続けてこられた方々の報告とそれに基づくパネルディスカッションを行い、その内容を地域に根差した活動の一つのモデルとして全国に発信することを目的として、鋭意準備を進めてきたところです。しかしコロナウイルス感染の拡大が続く状況の下で、残念ながらフォーラムの開催は見送らざるを得なくなりました。そこで以下ではこのフォーラムが企画された背景と狙いを記すとともに、予定されていた報告の内容をまとめ、全国山の日協議会の HP に公開するものです。

挨拶

「山の文化を未来につなぐ 山の日記念フォーラム in 加賀」企画の背景と狙い 全国山の日協議会 評議員 鹿野 勝彦 (金沢大学名誉教授 文化人類学)

国民の祝日としての「山の日」は平成 28 年に制定され、今年で 5 年目を迎えます。

「山の日」は日本の国土の 70 % 近くを占める森林を主とする山地の環境を保全するとともに、その恵みを生かして国民の健康を守り、地域の振興を図ることを制定の趣旨としていますが、そのためにはこれまで山地を生活の場として守り維持してきた人々の文化を次世代に継承することが不可欠です。

しかし現在の日本では、人口の少子高齢化と大都市圏への集中が進行しており、それにともなって山地の維持管理が十分に行われないことに起因する災害の発生をはじめとするさまざまな問題が起こり、さらにはこれまで脈々と伝えられてきた、山をめぐる文化が失われかねない事態も生じています。その一方で、こうした状況に危機感を抱き、山地、山林の維持、保全や再生に取り組むとともに、山にまつわる文化の継承をこころざすさまざまな活動が、全国で繰り広げられるようになってきています。

全国山の日協議会(協議会)はそのような山の文化の継承を目指す地道な活動が行われてきた地域の事例として、石川県の加賀市をはじめとする加賀地域に注目し、4 人の方々にその活動の内容を具体的に報告いただくとともに、そこで生じている課題についても、パネルディスカッションを通じて明らかにすることを目的として、フォーラムを企画しました。

フォーラムの規模は、直接の参加者を地域住民中

心とするため、さほど大きくはならないにせよ、地域に根付いた山の文化を次世代に継承する試みのモデルケースとして、その内容を協議会のチャンネルを通じて全国に発信し、広く共有することを目指していました。その背景には、これまでの協議会の活動の多くが、ともすれば大都市住民の視点からなされがちであり、その結果として山という場も、都市に住む人々がレクリエーションのために出かけてゆく対象としてとらえる傾向から抜けきれていなかったのではないかとという反省があります。

残念ながらフォーラムの開催は中止せざるをえませんでした。報告を予定していた方々の活動は個々にはささやかなものであっても、山を生活の場とする地域の特徴を生かしたユニークなもので、協議会としてはその内容を広く全国に発信し、我が国の山にまつわる文化とその継承に関心を持つ方々に伝えてゆくことには大きな意義があると考えます。

さいわいに現在ではさまざまな ICT を活用した情報発信のかたちが存在しますし、それを活用することを通じて、これまでつながりのなかった、山の文化の継承に関心を持つ、地域や年代を超えた人々のネットワークの形成、連携を促進する可能性も開けています。

我が国の山の文化とその継承に関心を持つおおくの方々に このフォーラムの内容を共有していただけることを念じています。

報告 1

鞍掛山と共に歩む里山の魅力作り ～未来へつなぐ地域づくりの活動～

滝ヶ原町鞍掛山を愛する会 会長 山下 豊



「鞍掛山」は石川県の小松市と加賀市の境界にあり、標高約 478mで麓から見ると馬に掛ける鞍のような形をしています。また江戸時代から明治にかけて日本海を航行した北前船や漁船などの航海の目印になった山で「舟見岳」とも呼ばれてきました。深田久弥氏は「鞍掛山は大日、富士写ともに江沼三山と称えられ、高さこそ低いがその模型的に整齊した山容は普くし衆眺めを集めている」と山岳雑記帳に記されています。

稜線伝いには平安時代に黒岩にあった洞窟に三人の修行僧（童子）がいたことから山名がついたといわれる三童子山標高約 493mがあります。当時の那谷小学校滝ヶ原分校の運動場から見える鞍掛山の雄大な形は小さいころから慣れ親しんできました。

若いころ青年団団長として、昭和 44 年に三童子山から鞍掛山へ縦走出来るスカイラインという登山道開設作業が初めての関わりでした。



鞍掛山遠望

私の住んでいる滝ヶ原町は現在人口 173 人で高齢化と人口減少も進む中、「滝ヶ原町鞍掛山を愛する会」を平成 9 年 3 月に設立しました。会員登録は 80 名で平均年齢も 60 歳を超えておりますが、「安全・健康・環境」をスローガンのもと活動しております。

登山者の増加による動植物等の自然環境への悪影響を地元住民が危惧し、鞍掛山の自然環境を保護し「豊かな町」として、様々な人々の交流により町の活性化につなげようと設立したことがきっかけです。

さらに、鞍掛山・三童子山は里山で昭和の 30 年代まで炭焼き、薪能、椎茸栽培などの資源を活用し、生活の場になっていましたが、年々高齢化も進み荒れてきている中で山の伝統がある地域の財産、お宝としてこの山を守ることが重要と考えて活動に入ったわけであります。

設立以来今年で 23 年になりますが具体的な活動を紹介します。

① 登山道や周辺的环境整備活動

草刈り、除伐、登山道整備、動植物を保護する環境づくり（ササユリ、ブナ、夏ツバキ等）

② 全国鞍掛山交流登山

全国に同じ名前の「鞍掛山」が 21ヶ所あります。会員で登山して全国制覇し、各地の「鞍掛山」を守る人たちとの交流ができました。

③ トンボの楽園（鞍掛山近くのビオトープ）の環境整備活動

- ・ハッチョウトンボやホトケドジョウなど希少動植物の保護や観察会実施

④ ボランティアガイドの育成活動やイベントで安全・安心の普及活動

- ・安全・安心の登山、普及、魅力発信など講座実施
- ・山を通じての健康増進活動としての健康登山の定期的な開催

⑤ 地域内のボランティア活動

- ・登山道路や貴重なアーチ型石橋周辺の保全活動

⑥ 上記の活動を進める中で、地域の人々に親しんでいただけるようにモニュメントの設置などを少しずつ進めてきました。

- ・鞍掛山行者岩に「鞍掛山千手観音」や鞍掛山鞍部に鞍掛山 11 面観音設置
- ・鞍掛山・アーチ型由来碑設置や鞍掛山「別名 舟見岳」由来碑設置
- ・滝ヶ原里山マップ作成や安全登山へ登頂距離、座標記載識別看板設置
- ・「山地里山研修会」や子供たちと環境教育体験活動を実施 「鞍掛山の源流を探して」



市民健康登山

これらの活動が評価されてきていることは私たちの誇りでもあります。

平成 23 年 小松市『こまつエコ大賞』

平成 26 年 環境省『生物多様性保全上重要な里地里山』に認定

平成 29 年 石川県『いしかわ森林環境功労者表彰』

平成 29 年 一般社団法人全国森林レクリエーション協会『森林レクリエーション地域美化活動コンクール』協会 長賞受賞

令和 2 年 北陸農政局『豊かなむらづくり』北陸農政局長表彰(滝ヶ原町内会として受賞)

次に、私たちの活動で特筆すべきことが 3 つあります。

① 一つはスタート時点から開催している鞍掛山の定期登山でイベント名を『秋の鞍掛山健康登山』して五感を活用し、自然環境と景観を楽しみ、登ることで筋力を養い、健康に過ごすことを目的にもしております。

登山愛好家は子供達を含めて毎年増加してきており、最近では県外からの愛好者も多く年間 1 万人に達してきております。愛知県から「一宮市から早朝出発で山代温泉に泊まります。急遽この登山を計画し、紅葉には少し早いけど起伏に富んだ良い山です。好天の下楽しい山歩きが出来ました。この山を愛し、いつも整備している地元の方々に御礼申し上げます。

② 二つ目は自然環境保護としての発信であります。平成 22 年に実施した『鞍掛山の源流を探して』というイベントで環境教育の一環で鞍掛山の源流から水路を下りながら宇谷川、動橋川経由、柴山瀉を見て海岸線まで水の流れ、水量、ゴミなどを五感で体験してきました。この体験活動で子供たちが感じたことは少しの水が段々多くなりやがてゴミ等が海岸でも増えることです。この時子供たちの発想は「振り返り」でゴミ取りロボットを作ればという考えでした。一滴の水でも大切にしてゴミを流さない、汚さないことです。私たちも気づかされました。山を大切にするには水を大切にするのだと。山と海は繋がっており、山を守ることは海を守ることだと実感しました。

③ 三つ目ですが、これらの体験から地元産の滝ヶ原凝灰岩を使用したモニュメントを滝ヶ原のシンボルとして平成24年に設置しました。

SDGsでは大切な目標として取り上げられていますが、水と環境、景観を大切に地球を守ることを里山から発信しようと取り組みました。碑の文言は「鞍掛山・三童子山から注ぐ水はアーチ型の石橋に流れ、そして日本海を経て地球全体へつながっています。滝ヶ原町では、環境、景観を大切に、然と共存、共生を全世界へ発信するため、この碑を設置します」



町の入り口の石碑

さて最後になりますが、最も新しいニュースです。

足掛け3年で待ちに待った「山の学校 鞍掛山」がようやく令和2年10月に完成いたしました。市、県、地元皆さんを始め全国からの温かいご支援のもと、「山の学校 鞍掛山」と施設を命名しました。

市民が楽しみながら学べるようにとの願いを込めました。施設内に登山道のマップ、鞍掛山の魅力、四季の動植物の写真、鞍掛山キャラクターの四季の登頂記念スタンプ等があります。白山眺望憩いの広場の整備、無事に帰ること願って語呂合わせし滝ヶ原凝灰岩で制作した「無事カエル」の置物制作、頂上の方位盤などを整備しました。

課題としては、会員の高齢化と若い人に如何に山の文化を伝えてゆくかですが、今回の施設や他の整備により鞍掛山を通じて環境教育の拠点として、子

供たちにこの「山の学校 鞍掛山」を拠点に環境教育をも充実させて、発信してゆきたいと思っています。

また、鞍掛山を中心したスロースターリズムを市、県、地元団体の三位一体で企画しようと頑張っています。滝ヶ原町鞍掛山を愛する会のこれまでの経験を活かして、一泊二日コースを検討しています。

A 地元のお米や山菜、自然の恵みを楽しむコース

初日は自分たちでお握りを作り鞍掛山へ登山、山で昼食し下山後は地元の民家を再生したコテージで一泊、あくる日は山菜ウォークして採取したものを試食会で楽しむ。

B 滝ヶ原と歴史遺産巡りと鞍掛山登山コース

初日は滝ヶ原の歴史遺産巡りその後里山自然学校こまつ滝ヶ原で、地元で採れた農産物を利用した里山定食を味わい午後からは滝ヶ原の凝灰岩で彫刻体験 夕食はコテージで、あくる日は鞍掛山登山で自然観察会を楽しむ。

終わりに、鞍掛山を通じて環境を守り、自然の大切さ、安全・安心で健康推進を図ることが山の文化を守ることだと確信しております。今後ともよろしくをお願いします。



山の学校

報告 2

若者たちに支えられて

一般社団法人 おおづち 代表理事 二枚田 昇

過疎化が進んで自分の生まれた故郷が廃村になってしまうのではという思いで、自分にできる事を考え昔この地区で行われていた炭焼きを復活させました。長年炭焼きをしていた父親の助けを借りて小さな窯を作り知り合いの山から木を切り出し約一週間かけての炭焼き作業です。

初めての窯出しは緊張しましたが楽しみでした。炭の購入依頼も少しずつ増えてきて年間に 5~6 回の炭焼きを行っていました。その当時に伐採した山の木が今では3メートル以上の高さになり森が若返りました。

同時期に小学校 5、6 年生対象の自然体験の受け入れを始めました。加賀市内の小さな学校を中心に 7、8 月の夏シーズンだけの活動でした。一泊二日の日程で初日の午前中は村のすぐ上の山登りです。

標高 500m くらいの低い山なのですが、斧いらずの山ということで、ブナ、ケヤキ、などの大木が沢山あります。木登りをできる木がありこれは子供たちに大変評判が良かったです。このような低山にこれだけのブナ林があるのも珍しいのでブナの実や大木に付けられた熊の爪痕などと良い経験になったのではと思います。

この当時はブナの木にも花が咲き実がついたのですが、最近 5、6 年は花も実も付いたことはありません。今年に至っては村の中の柿の木にも実がなくクルミも多くは無くて、40~50 年の杉の木が熊によって皮を剥がれている状態です。このままだと切り出す時期が来ている杉の木は近い将来に全滅の可能性があるのでのでは？

山奥に生活する私にはこの現状を見て熊が町へ出ていくことがあり得ることだと思います。冬眠前に色々なものを食べて最後に食べるものが決まっ

ているそうです。空腹では彼らも冬眠することはできないのではないのでしょうか？

イノシシなどの獣害に悩まされる山奥の村ですが、景観維持という観点で 2013 年からボランティア受け入れを行っています。

始まりは国際 work camp ということで日本人 2 人海外から 3 人の若者たちで始まりました。国籍はウクライナ、フランス、アメリカ、で二週間の共同生活でした。棚田作業、畑作業、石垣の修復、など 7 月の暑い日に頑張ってくれました。初めての受け入れで少し不安もありましたが、明るく楽しい若者たちであつという間の二週間でした。

国際 work camp は夏と冬に開催していて、これまでに 20 か国以上の国から参加してくれています。都会育ちの若者たちには昔ながらの山村の生活が新鮮であり楽しい時間のようです。ここでの新しい出会いが彼らにとっては将来への良いきっかけにもなっているようです。

この受け入れは東京の NICE という NGO 団体がコントロールしてくれています。

NICE からの提案で台湾&日本二カ国 camp も夏冬と毎年二回開催していて、毎回台湾から十数名日本から 4、5 名の参加者があり 9 日間の滞在で、これまでに 100 名以上の台湾からの若者たちが来てくれています。台湾の若者たちにとってもこの集落の生活は珍しく刺激的なようです。

特に冬の雪は雪のない台湾の人には感激のようで雪かきのつらい仕事も楽しくて、雪合戦をしたり雪ダルマを作ったり雪景色をカメラで写したりと思い思いに体験しているようです。そんな彼らに会いたくて台湾まで出かける楽しみも増えました。

参加者の意見を取り入れて、社会人にとっても参加しやすいようにということで週末 camp を4月から11月まで毎月開催しています。

リーダーは大学生がすることが多いのですが、学生たちにとって社会人はすぐ目の前のことということもあり毎回有意義な時間をすごしているようです。

自分の生まれ故郷が廃村になってほしくないという思いからボランティアの受け入れを始めたのですが、若者たちと触れ合ってみて彼らの思いや悩みなどを聞き、彼らがどんな思いで今を生きているのかが少しばかり理解できたように思います。

この山奥は昭和30年代の風景がそのまま残っているような場所です、

非日常なところで非日常な生活をして初めましての友達と自分たちの将来についていろいろな話をして、それぞれがそれぞれの道を歩みだしていく。

受け入れを始めて7年、学生だった若者も社会人になり、野菜を送ってくる者、地酒をもって山奥へ帰ってきてくれる者、仕事のストレスで悩んで憂鬱な顔しながら帰ってくる者、そんな彼らの顔見ながらいろんな話をしながら飲むお酒はおいしいです。

子供の居ない私はこんな経験をするには無いのだろうと思っていましたが、多くの若者たちのお陰で年齢60を過ぎて楽しい毎日を送っています。この年齢になってもまだまだ未熟者だと思っているのですが、彼らの前ではまだ少し役に立てるようで楽しくなっています。

この何もない小さな過疎の村が何かしら魅力あるようで不思議です。支えられています都会育ちで山奥のことを何も知らない若者たちに、大土での7年間は多くの過疎地が抱える問題解決の一助になるのではないのでしょうか。



報告 3

《深田久弥山の文化館》のご紹介

NPO 法人 深田久弥と山の文化を愛する会 紋谷 友幸



深田 久弥

1903(明治 36)年 3 月 11 日 石川県加賀市大聖寺生まれ。

11 歳の時に先輩と共に地元の《富士写ヶ岳(942 m)》に登頂したことがきっかけで登山に興味を持つ。

福井中学校(現藤島高等学校)、帝国大学(現東京大学・中退)を経て、改造社入社。

鎌倉文士の一人として多くの作品を執筆しつつ登山に専念し、1964(昭和 39)年に読売文学賞となる《日本百名山》を出版。

その後も《ヒマラヤの高峰》《シルクロード》等、多くの作品を執筆。

1971(昭和 46)年 3 月 21 日 山梨県茅ヶ岳を登山中に脳溢血にて死去(享年 68 歳)



1997(平成 9)年 地元出身の作家であり登山家でもあった深田久弥の功績を広く紹介する為に、地元文化協会の中から《深田久弥を愛する会》を設立し、同時に上記目的を遂行するための施設開設を加賀市と協議のうえ 2002(平成 14)年 12 月、深田久弥山の文化館を開館しました。

初代館長 故 高田宏(作家)

敷地面積 約 2,860 m²

建物延べ床面積 約 680 m²



この施設は大正天皇・昭和天皇の御大典の際にお召しになる羽二重を制作・献上していた織物会社の事務所・倉庫などを流用したものです。

明治43年に作られた建物で国の登録有形文化財・近代化産業遺産建築物に指定されている由緒ある建物でもあります。

また、敷地内には樹齢 650 年と言われている大イチョウ、樹齢 750 年と言われているスダジイ等多くの巨木が茂り、異空間を感じさせる独特の環境が構築されています。



《深田久弥を愛する会》は 2015 年 4 月に《NPO 法人深田久弥と山の文化を愛する会》となりましたが、加賀市の指定管理者として深田久弥山の文化館の管理をしながら下記事業を展開しています。

① 深田久弥に関する資料の収集・展示・発信

② 講師を招いた講演

(イベント名《聞こう会》を開催)

令和元年度実績

7 月：奥原仁作 (参加 30 名)

10 月：宮下由美子 (参加 25 名)

11 月：佐々木泉 等 (参加 60 名) 等



③ 深田久弥の作品を精読し作品のより深い意味を学習する読書会

令和元年度実績

6 月：『日本百名山』「岩木山」(参加 11 名)

1 月：『日本百名山』「北岳」(参加 15 名)

2 月：『日本百名山』「浅間山」(参加 15 名) 等

④ 施設整備



⑤ 会員親睦を目的とした登山会・親睦会などの行事

⑥ 県内山岳会との共同事業【久弥祭】

毎年 4 月第四日曜日に富士写ヶ岳 (深田久弥が初めて登った山) 登山口にて開催。

⑦ 地元小中学生による絵画・写真等の作品展

(《ふるさとの自然ふれあいコンクール》)

⑧ 写真展・絵画展などの作品展の開催

⑨ 広報誌の発刊

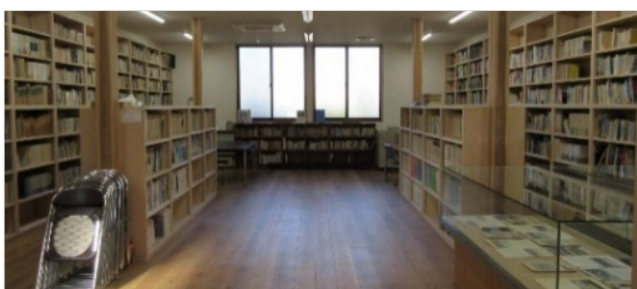
(《山の文化館だより》年 4 回発行)



《聞こう会》においては地方の施設であるにもかかわらず開館以来多くの著名な方々に御来館いただき貴重なお話を頂いてきました。

特に、深田久弥と交流のあった《田部井淳子さん》・《白旗史郎さん》・《直木幸次郎さん》・《高田宏さん》達のお話はもう聞くことが出来なくなっており、講演録は貴重な資料となっています。

資料は主に深田久弥に関する資料・山に関する書籍等を中心に継続し収集しています。



開館当時は約2,000点の書籍・資料でしたが、全国の深田久弥ファンや山岳愛好家の方々によるご協力により現在は1万5千点以上になっています。

このため2018年8月に貴重な書籍・資料を永く保管するための新たな収蔵庫を増設し、ご来館の方々には自由に閲覧していただける環境を整えました。

本棚に若干の余裕がありますので皆様の寄贈をお待ちしています。

当館は《完成したミュージアム》ではなく《成長を続けるミュージアム》を目指しています。その方針は開館当時から変わりませんし、当館を管理・運営する我がNPO法人の方向性も変わりません。

小さな施設ではありますが皆様のご協力をいただきながらさらに進めていく所存です。どうぞ遊びに来てください。

報告 4

伝統を通じて過去と未来をつなぐ

白山手取川ジオパーク推進協議会 メイ・スーザン



檜細工は400年以上前から続く、石川県白山市の伝統工芸です。言い伝えによると、旧尾口村深瀬に辿りついた、霊峰白山を登る僧が、手取川沿いの狭くて厳しい土地で農作業さえできない深瀬の人に、自分の被っている笠を渡して、その作り方を教えたと言われています。それ以降、深瀬ではずっと檜の笠が作られてきました。海外からの人気もあり、たくさん作られていた檜細工ですが、1977年に、手取川ダム建設により、深瀬が水に沈み、集落の人々が移動する時点では、生産量が減少傾向にありました。その後はさらに減少し、衰退の一途を辿っていますが、今、オーストラリア出身のメイ・スーザンさんが後継者として、檜細工の復興に励んでいます。

常に進展している現代社会では発展の速さのあまり、過去の知恵が失われやすい状況になっています。「イノベーション」ばかりが注目される現在、祖先から伝えられた昔ながらの古い技術や知識は不要とされがちです。しかし、この古い知識にはたくさんの有用な情報が含まれていて、過去を学ぶことを通してよりよい未来へと進むことができると思っています。特に伝統工芸は現代社会の課題である自然資源の利用や少子高齢化など、様々な課題を解決する力を持っていると信じています。

歴史を通じたイノベーション

みなさんは「伝統工芸」と聞くと、数百年ずっと、全く形が変わらない物だと考えますか。そうだとすると、次々と新しい物が作られる現代の中で、形が変わらない伝統工芸は面白くないと感じるかもしれません。

ですが、実は伝統工芸は常に変化しており、何百年も同じ形が続いている訳ではありません。檜細工の定番は檜笠ですが、檜笠はテクノロジーに合わせて進化しています。例えば、昔は笠の淵止めをする時に、竹の輪を針金で結びつけており、これは非常に手間がかかる作業でした。しかし、ミシンが発明され、ミシンでササッと留める方法により、早く作れるようになりました。他にも、昭和初期には檜細工の帽子も開発されました。時代が求める価値観をくみ取ったこの帽子は、アメリカまで輸出されるほど、非常に人気となりました。

このように、檜細工には、様々なイノベーションがありました。そして、この知識は工芸とともに伝わり、こうした工芸の歴史の中でテクノロジーの進化とともに、そのテクノロジーを利用したより良い伝統工芸を作ることが可能となります。例えば、現代の檜細工では笠だけではなく、天上の飾りやアクセサリー、ランプシェード等、新しい物が常に作ら

れています。又、オーダーメイドや、コラボ等による制作も行われています。伝統工芸で培われた知識を活かし、現代のテクノロジー、デザイナーや工芸師と協力し合って、最新技術と融合した新しい伝統工芸が次々と作られます。

郷土愛を深める

自分の国、自分の出身などに誇りを持つこと、いわゆる「郷土愛」は自分のアイデンティティーの一つになります。私は日本がとても好きですが、生まれ育った故郷での思い出を心の中でいつも大切にしています。ですから、私は生まれ育った故郷には、何歳になっても思いを馳せるでしょう。しかし、現在、オーストラリアでも、日本でも、田舎では仕事の選択肢が少ないと感じる若い人が多く、良い仕事を求めて、地元から出ていく傾向が強くなっています。若い人が減り続け、後継者が少なくなっていくため、フィードバックループになります。

現在、檜細工はかつての深瀬に住んでいた人や、その周辺の街に住んでいる人々に非常に愛されています。この方々は地元の工芸を後継したいという思いから、檜細工を習っています。そのおかげで、数年前から、檜細工が再び注目され、人気が出るようになりました。徐々に檜細工を習う人が増えてきて、ますます檜細工の存在感が高まっています。伝統工芸には郷土の歴史と魅力が詰まっているので、地元で誇りを持っている人に対しては非常に馴染みやすい物になると考えています。

檜細工がもっと有名な伝統工芸品になれば、観光などを通じて、様々な分野に広がり地元での起業や雇用の機会が増え、若い人が地元で誇りを持ちながら働くことができ、郷土の魅力を強く発信できると思っています。

持続可能な社会になる

昔の生活は主に持続可能でした。特に山の方の暮らしでは、供給連鎖が短く、資源は身近にある自然

の中で手に入れることができました。昔の人は、山の資源を使い果たしてしまうことのないよう、資源を大切に使い、循環させるという意識がありました。

しかし、今は、供給連鎖が非常に長く、どこにいても世界中の資源を手に入れることができます。また、その資源は数世代にかけて使用できるので、資源の枯渇は、今の時代では喫緊の問題ではないと思われがちです。資源を大切に使う意識が低く危機感が無いと感じます。それでも、世界では資源が無くなっていたケースも出ており、資源の枯渇問題は重要なことと捉える必要があります。今のうちに社会全体で資源に対する意識を改善しないと、次の世代は大変な状況になるでしょう。

社会を完全に改善するのは非常に難しいことですが、持続可能な社会づくりの取り組みは少しずつ進んでいます。その取り組みの一つが伝統工芸です。古くから伝わる伝統工芸は、当時の持続可能なシステムとして確立されています。材料は全て自然から取れるものであり、自然に返すこともできます。また、多くの資源は地域産のものを使っているため、資源を自分の目で見て管理ができます。プラスチックやリサイクルできない材料で作った物より、自然の材料から作られた伝統工芸品のほうが高品質で長持ちし、現在の職人の技術の向上にも役立ち、将来の世代にもつながっていきます。

古くから山の暮らしに息づく伝統工芸の知識と技術、そして現代のテクノロジーが融合することにより、さらに革新的な伝統工芸を創り出すことができます。昔から伝わるこうした伝統工芸は、地元の人に非常に愛され、地域のブランド化に大きく貢献するものとなります。材料は身近な自然から供給されるため、将来にわたって作り続けることができます。伝統工芸を次世代につなぎ、持続可能な社会づくりを進めていきましょう。

筆者について

メイ・スーザンはオーストラリア出身で、現在は白山市の白山手取川ジオパーク推進協議会に勤務しています。完全に田舎、というか山で生まれ育ったので、自然と山が大好きです。また、子供の頃から手先が器用で、色々な工芸に興味がありました。2016年から石川県に住みはじめて、日本の伝統工芸

に非常に興味が沸き、伝統工芸を習いたいと思いました。2017年の夏に檜細工を紹介され、すぐやりたいと決心し、すぐ先生に「教えてください!」とお願いして、練習を始めました。現在は檜細工をやりながら、白山手取川ジオパークを通じて白山の自然や地質の魅力、そして伝統工芸を世界に発信しています。



2021年1月15日 発行

発行者 一般財団法人全国山の日協議会 理事長 梶 正彦

〒160-0008 東京都新宿区四谷 2-10-5 ハツ橋ビル 301号室

電話 03-5315-0652

URL:<https://www.yamanohi.net>

メール:office@yamanohi.net